青梅市文化財ニュース

第２５４号

平成２０年１２月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859）

塩船観音寺の仁王様の股くぐり（麻疹よけ・疱瘡よけ）

麻疹（はしか）は、ここ数年流行するようになり、ニュースでも取り上げられるなど注目を集めています。昔は、この麻疹と、症状がよく似た疱瘡（ほうそう）と呼ばれた天然痘は、感染力が強くしばしば流行し、死亡率も高かったので、人々に大変恐れられた伝染病でした。歴史上、東北の武将・伊達 政宗が右目を失ったのは疱瘡の後遺症とされ、中米・アステカ帝国が滅亡したのは、スペイン人が持ち込んだ天然痘も一因といわれています。今では、麻疹は予防接種を受ければ罹らないですむ病気になり、天然痘は種痘のお陰で 1980 年に世界保健機構（WHO）により根絶宣言されました。

予防法の無かった昔、この伝染病に対処する１つの方法として、人々は‘罹らないですみますように’‘罹っても軽く済みますように’と、この病に霊験あらたかだと評判になった神仏などにお参りしました。

この度、予防接種が普及する時代になっても、塩船観音寺の仁王門に立つ仁王様の股くぐりをすると‘疱瘡よけ’になるとか‘麻疹が軽く済む’といわれ、赤ん坊や子供を連れた人々が近隣から訪れていたというので、聞き取り調査をしてみました。

○ 昭和９年に七日市場近くの藤橋で生まれ育った女性が、明治 31 年生まれの母親から聞いた話

「昭和 12 年頃、‘疱瘡植え（種痘接種）’に近所のお嫁さん達と、子供を負ぶって出かけ、その帰路、皆で塩船観音寺の仁王様の股くぐりに行きました。お別当様のおばあさんにお願いして、仁王様の門のくぐり戸の鍵を開けて貰い、子供を股くぐりさせました。こちら側から股くぐりさせると、反対側でおばあさんが子供を受け取ってくれました。当時、股くぐりは‘麻疹よけ’になるといわれていましたし、‘疱瘡植え’の日は、嫁が公然と外出できるので、家から解放される気分で楽しみでもあり、おしゃれして遊山気分で出かけました。」

○ 昭和 16 年に今寺で生まれ育った男性の話

「子供の頃、麻疹が軽く済むからといって、塩船観音寺の仁王様の股くぐりに、親が連れて行ってくれました。怖くて泣いた記憶があるので 3～4 歳くらいだったのでしょうか。当時、お別当の師岡さんが仁王様を管理していました。」

仁王様の股くぐりは、仁王が仏法を守護するために寺門の両側などに安置されるので、恐ろしい病魔をも退散させてくれると期待されて行なわれるようになったのでしょうか。その始まりについては不明ですが、史料では「大正年間に疱瘡よけに行われていた」（野村　慎三郎(1988)『「疱瘡神」の碑』. 青梅市広報. 651.）とあります。また、今回の調査では、特に男児のお参りが多かったとも聞いたので、戦争の影響が濃い時代、跡を継ぐ児を護

りたいという願いもあって、‘疱瘡植え(種痘接種)’と重ねての‘股くぐり’だったのかもしれません。

なお、当時の仁王門と仁王像は現在とは違い、長年の風雨で相当傷んでいたといいます。お別当さんと呼ばれていた師岡さんや地元の人々は、寺の保護のために文化財指定をと訴えました。その甲斐もあり、仁王門は昭和21年に国宝に指定され、その後の新法施行により昭和38年に国の重要文化財に指定され、昭和28年には解体復元工事が行なわれ、先頃は数度目の茅葺屋根の修理も行なわれ、現在の立派な姿になりました。金剛力士像(仁王様)は昭和35年に都の有形文化財に指定され、傷みが甚だしかったため昭和47～48年に修理が行なわれています。

今では‘股くぐり’は遠い過去の話になってしまいましたが、仁王様をその気で見てみると、子どもを通すには空間は狭く難しそうです。この度の調査で、二人がかりと聞いたので納得できました。また、史料に「はしかの流行する時は、仁王のまたくぐりをする。こわがる時は、着物をくぐらせる。」(青梅市教育委員会(1972)『青梅市の民俗　第２分冊』. 179.)とあり、怖がって股くぐりをいやがる子どもに困惑して考えついたであろう窮余の策に、親の願いの真剣さを感じます。

写真は、『青梅市制50周年記念　20世紀の青梅』(酒井 正雄(2001). 西多摩新聞社出版センター. 53.)に掲載の、解体修理以前と推察される塩船観音寺　仁王門です。

(文責　三好　ゆき江)